

2024年2月4日
荻窪教会創立記念日礼拝説教

立ち帰れ

イザヤ書 第31章 1～9節
使徒言行録 第3章 18～21節

小海 基

はじめに

今日は、1933年（昭和8年）2月5日に誕生した私達荻窪教会の創立記念日礼拝です。明日の2月5日から92年目の歩みが始まることとなります。

イザヤ書の連続講解説教を2021年11月の召天者記念礼拝の日から始めました。それがいよいよ本日、第31章まで進んでまいりました。

今日の聖書箇所は、ちょうど創立記念日礼拝にふさわしい御言葉に巡り合っています。



預言者イザヤの言葉に最も真摯に耳を傾けたヒゼキヤ王

「イスラエルの人々よ、あなたが背き続けてきた方に立ち帰れ」(第31章6節)とイザヤは語るのです。

イザヤ書は一番始めの1章1節のところ、ウジヤ王から始まってヒゼキヤ王に至るまで4代の王様の時代にこの預言者が活躍したと記録しています。今日の第31章というのはヒゼキヤ王の時代、イザヤの最晩年の預言と言われているところ。4代の王様の中で、特にヒゼキヤ王という最後の王様は預言者イザヤの言葉に真摯に耳を傾けました。単に耳を傾けるだけではなく、政治改革をもって応えた王様であったことは列王記下18～20章や、歴代誌下29～32章の記録からもよく分かります。

大体、列王記が2章、歴代誌下4章と長い章を割いてヒゼキヤ王の記録を残している事自体、ヒゼキヤ王が南ユダ王国で困難な中にあっても信仰深い名君であった何よりの証拠です。

ヒゼキヤ王が25歳で王に即位して7年目の紀元前722年に北イスラエル王国はアッシリア帝国によって滅ぼされるといふ大変な嵐の時代が襲いかかります。

イザヤは正義と公平を通す政治を訴え、アッシリアの脅威は静かに神に委ねなさいと一貫して預言の中で語っていました。しかしヒゼキヤ王ほどの名君であっても、実際に18万5千人の大軍を率いてエルサレムにアッシリア軍が迫って来て、エルサレムも呑み込まれてしまう寸前にまでなっている、という状態を見た時、動揺せざるを得ませんでした。

しかしヒゼキヤ王はただ黙って事態を静観していたわけではないのです。今でも聖地旅行でエルサレムを訪れたなら、観光客は案内されるそうですが、ヒゼキヤ王はエルサレムがアッシリア軍に取り

囲まれて兵糧攻めに遭遇しても耐えられるよう城壁を堅固にし、ギボンの泉からシロアムの池までの全長525メートルに及ぶ地下水道を堅い岩を掘削して完成させるのです。このシロアムの池は、のちにイエス様が目の不自由な人を癒される池です。

頻繁に出てくる「災いだ」の言葉

外交面でも、アッシリアに対抗できる西の大国、エジプトと手を組んで何とか牽制しようとしたのです。ヒゼキヤ王が外交的にエジプトの力に頼ったことを神様は問題視されました。31章1節の冒頭に「災いだ」とありますが、「災いだ」で始まるイザヤの預言は当時、特に晩年になればなるほど、イザヤの口癖のように捉えられていた節があります。

この31章の前後を見直しますと28章の冒頭も、29章15節の冒頭も、30章1節も「災いだ」で始まっています。31章のあとの33章の冒頭も同じです。預言の冒頭に5回も

告げられると、聞く方は段々げん
なりしてしまいます。

しかし、この5か所の「災いな
るかな」は今の時代、イザヤの時
代から2700年あとの現在の私
達が言われても、やむを得ないと
思われます。よりによって約束の
地に住む民があつた奴隷の家
家としてあとにできたエジプト
に助けを求めるのかよ、というこ
とだからです。

滅んでしまった北イスラエル
も、そして今大変な恐怖に晒さ
れている南ユダ王国も、およそ
500年前、モーセに従つてこの
約束の地にやつてきてこの国を築
いたわけです。その出エジプトが
このイスラエルの民の原点です。
二度と奴隷の軛(くびき)に繋が
れてはならない、エジプトから神
様によつて導き出されたのだ、そ
ういう思いをもつて神様の前に平
等で自由な約束の地を築いてきた
民なのです。

いくら18万5千人のアッシリア
帝国の大変な脅威に揺さぶられた
としても、そこであの奴隷の家で
あつたエジプトに助けを求めるの

か、エジプトを頼みとするのか。
馬や馬車の数が多ければよいの
か。当時の馬や馬車は21世紀の今
で言えば発射が繰り返されている
ミサイルのようなものです。

馬は紀元前18〜17世紀に当時の
ヒクソス朝のエジプトに持ち込ま
れたようだと、描かれて残ってい
る絵から分かつています。古代オ
リエント、エジプトが超大国に
のし上がつていくのはこの馬や馬
車隊によつてでした。その馬や馬
車隊が出エジプトしたイスラエル
の民を追いかけてきて葦の海まで
迫りましたが、神様の手によつて
真つ二つに割れ、出エジプトの民
が通過したあと、あの海が閉じら
れて馬や馬車が海の底に沈められ
るのです。それが出エジプトの最
も大きな出来事でした。

(神様は)翼を広げた鳥のよう
に……守られる(31章5節)

紀元前722年に北イスラエル
が滅亡した時も、北イスラエルの
最後のホセア王はよりによつてこ
のエジプトに助けを求めましたが

何の効果も上げず、却つてアッシ
リア帝国の逆鱗に触れたことにな
りサマリアが陥落することになつ
たわけです。またイザヤ書第20章
に出てきましたが、40年にわたる
イザヤの預言者生活の中で最も恥
ずかしいパフォーマンスを伴つた
預言、真つ裸、裸足で3年間、イ
ザヤが警告し続けなければならな
かつたそういう預言を神様が託さ
れるのです。アッシリアの王サ
ルゴンがアッシュドドを襲つたとき
に、エジプトやクシュ、今のエチ
オピアを頼みとしてはならないと
いうものでした。

エジプトに頼るのは奴隷の家
に、この自由な約束の地、この出
エジプトの自由な国を売り渡すよ
うな事だとイザヤは一貫して語つ
たのです。3節に「エジプト人は
人であつて、神ではない。その馬
は肉なるものにならず、霊ではな
い。主が御手を伸ばされると助け
を与える者はずまずき、助けを受
けている者は倒れ、皆共に滅びる」
とあります。この言葉こそ無にな
ることはない、確かな神様が翼を
広げた鳥のように守られる、とい

イヤは語るのです。

今日の創立記念日に私達が最後
に聞かなければならないのは6
節「イスラエルの人々よ、あなた
たちが背き続けてきた方に立ち帰
れ」の御言葉です。90年の歴史を
刻んできたその原点はどなただつ
たかを、私達、しっかりと心に刻
まなければなりません。

オット社製オルガンの購入先は
八王子ベテル伝道所に決定

50年にわたつて使用してきたパ
ウル・オット社製ポジティブオル
ガンは、私達と同じ西東京教区で
開拓伝道に取り組んでおられる千
原創先生の八王子ベテル伝道所が
購入を決定され、2月13日に移設
されることになりました。このオ
ルガンが、立ち帰るべきところを
指し示す礼拝で豊かに用いられる
ことを祈り願いつつ送り出したい
と思います。

(出席30名。文責・編集委員会。
市川義和要約)